

タイ北部におけるバプテスト派宣教の歴史的変遷と開発プロジェクト：ボーケーオ地区のカレンを事例として

田 崎 郁 子

1. はじめに

本稿では、タイ北部におけるバプテスト派キリスト教の中心地の1つであるボーケーオ地区¹を事例に、1930年代から2000年代までカレンを対象として行われてきた宣教活動の過程を示す。そして、宣教活動と開発プロジェクトが車の両輪のように入れ子状になって進められてきたこと、それが現在換金作を大々的に導入しカレンらしからぬとされる当地の忙しい生活を形成する母体となったと論じる。

カレンと呼ばれる人々は、主にタイとミャンマーに居住する。マイノリティの中でも比較的多くの人口を占め、植民地統治やその後の国民国家化の過程を通して、国家の中でのマイノリティの位置づけを考える際に重要な存在である。カレンの間では1828年ビルマで最初の受洗者が登場して以降、急速にキリスト教が布教し、タイとビルマを中心とする地域のバプテスト派の伝道や教会活動を牽引してきた。東南アジアにおけるバプテスト派宣教の最も成功した事例と

1 現在タイ国カレン・バプテスト会議 (TKBC: Thailand Karen Baptist Convention) は、図1のように組織化され、上から TKBC 本部→10の教区 (*Kr. k'wauz/ Th. phak*) →地区 (*Th. khet*) →教会タオブゴ (*Kr. taj of hpgof/ Th. khristcak*) となっている。カレン語タオブゴとは、中心となる教会に会員として所属する信徒を一定数以上もつ信徒の集合体のことである (建物としての教会はジョパーユワ: *Kr. jo ba ywa*=祈禱所と言われる)。本論文では教会と訳す。1つの教会タオブゴを形成する信徒の居住域は村落の境界とおおよそ一致するが、多少の重複がある。本文中に登場するM教会は1つのタオブゴとして独自の財政と委員会をもつ教会であり、ボーケーオ行政区内の9つのタオブゴとともにボーケーオ地区を形成する。ボーケーオ地区はチェンラーイ地区とともにチェンラーイ教区を形成する。

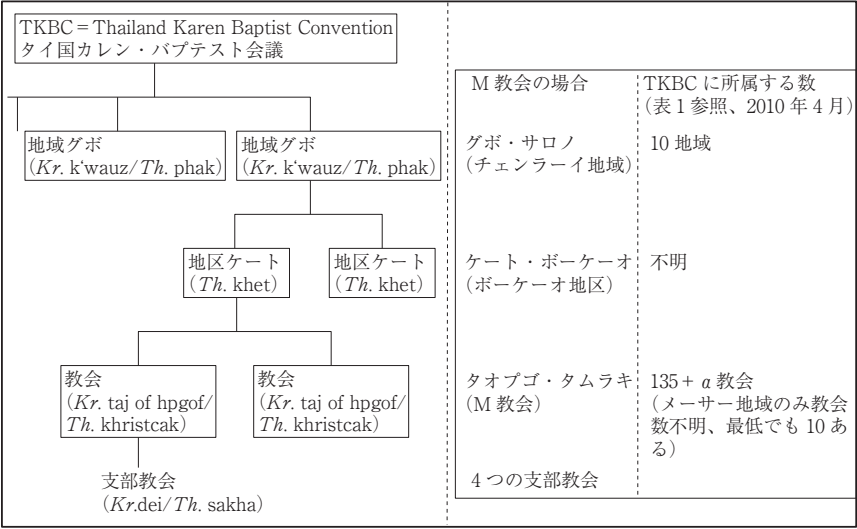


図 1 TKBC の組織構造

言われ (藤村 2015)、他の民族への伝道を主に担ってきたのもカレンである。

こういった事情を反映し、カレンのキリスト教受容に関してはこれまでも多くの研究がなされている。にも拘わらずそのほとんどは、カレンという民族のアイデンティティ形成あるいは保持 (池田 2012、Hovermyr 1989、Keyes 1979、Kwanchewan 2003 : Ch7、Womack 2005 : Ch3, 4) や山地と低地との関係の中で (Hayami 2004 : Ch7) キリスト教受容を論じてきた。同様に、東南アジアにおけるマイノリティのキリスト教や改宗に関する人類学的先行研究でも、そのほとんどが改宗と民族境界・エスニシティに着目し、キリスト教受容と信仰の変容を分析してきた (Tapp 1989、Kammerer 1990、1996、Salemink 1997、2009、Hefner 1998、西本 2009)。こういった研究はまずキリスト教を民族のナショナリズム形成の要因として捉えたために、その他の視点、例えばキリスト教を受容した人々が、実際にどのように生活を再編しながら暮らしているのか、という視点は抜け落ちていた。しかしアフリカやオセアニアなど他地域の研究では、キリスト教実践が生活スタイルや社会のあり方そのものをも再編してきたことが指摘されており (Comaroff and Comaroff 1991、1997、石森 2011)、こういった視点抜きに、キリスト教がもたらしたものを論じることはできない。加えて近年、宗教と開発の接近に伴って、宗教組織や宗教的職能者が開発を担うなど開発研究の分野で

「宗教への転回 (turn to religion)」が注目を浴びようになっている。また人類学では社会における宗教の役割や貢献に着目して宗教と世俗という二元論的な対立を取り払うような研究が行われているという (石森 2019)。

そこで本論でも上記の視点を援用し、宗教と開発との関係に着目する。そして、主に宣教側の文献資料から、地域における宣教活動と開発プロジェクトの展開を検討し、歴史的に辿ることで、カレンの人々のキリスト教受容がもたらした社会や生活の再編の一端を明らかにする。以下ではまず、タイにおけるバプテスト派の宣教活動の広がりの中に調査地ボーケーオ地区とM教会²を位置づけ、ボーケーオに教会と信徒の集落が設立されるまでの過程を簡単に辿る。次に、ボーケーオ地区における外国人宣教師の活動と開発プロジェクトの関係性及びそれらが及ぼした影響について示す。特に、諸活動や開発プロジェクトにおいて、①女性労働や現金収入源確保が強調され、②外部社会との連結機会が増え、③生業における様々な技術革新が導入され、④貯蓄概念の誕生を促した、ことを指摘する。そして、宣教と開発が相乗効果をもたらしながら地域の発展に寄与してきたこと、それが、イチゴという換金作物を大々的に生産する現在の生業基盤を形作ってきた要因の1つであることを示す。

調査地はチェンマイ県サムーン郡ボーケーオ行政区に置かれたボーケーオ地区とその中心的教会であるM教会である (図2)。ボーケーオでは1930年代にバプテスト派による宣教活動が開始され、M教会が設立されると、地域の宣教拠点、開発拠点として発展し、北タイのバプテスト宣教の1つの中心地となっている。標高1000mの山中にありながら、宣教活動と行政・民間による種々の開発プロジェクト、鉱山採掘、換金作物としてのイチゴ栽培の浸透などの影響下で、町のように発展が行き届いた地域である。M教会のあるM集落あるいはボーケーオは、他のカレン地域と比較して、村人からも、村外のカレンからも、まるで経済合理性を具現化したかのように語られることが多い。例えば、「現

2 ボーケーオ地区に関しては脚注1参照。M教会はボーケーオ地区最初の教会で設立当初から現在まで地区の教会活動を牽引してきた。ボーケーオ行政区 (Th. Thambon) を構成する第4行政村 (Th. mu 4) を成す4つの衛星集落 (Th. yom ban) のうちの1つ、M集落にある。第4行政村はおよそ200戸からなるが、M集落にはその半数の100戸があり、また歴代の第4行政村村長全員を輩出してきた中心的な集落である。

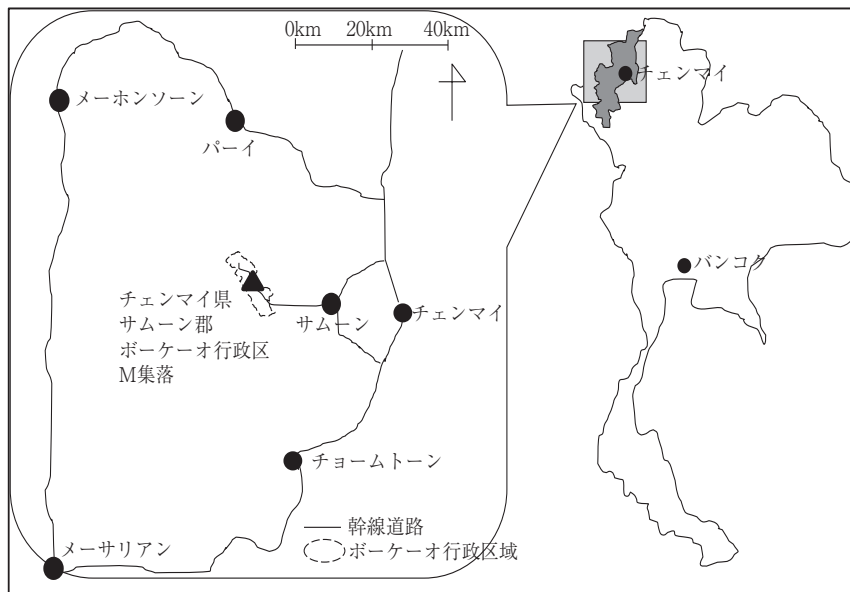


図2 調査地位置図

金のことばかりしている」「現金がないと暮らせない」「しゃかりきに働く」「勤勉に働くことが常に監視されている」「カレンではなく北タイ人になり下がった」という言い方がよくなされる。こういった語り口は、カトリック教会と信徒の設立したカレンの村で王室発信の「足るを知る経済 (*Th. setthakit pho phiang*)」が流布し、自給自足的な生活が良しとされること (田崎 2010)、また北タイ農民連合 (Northern Farmers Network) などの NGO 活動に加わる村で、「森

3 北タイ人とは、タイ系言語のひとつである北タイ語 (*Th. kham muang*、あるいはランナー語、ユアン語とも言われる) の話者であり、主にタイ北部に居住する人々を指す。13世紀末から19世紀末までタイ北部のチェンマイを中心にランナーと呼ばれる盆地政体を築いた。

4 現地語表記について。本文中では、単語の前に以下のように略記することで、原語がタイ語であるのかカレン語であるのかを判別する。すなわち、タイ語の場合は単語の前に「*Th.*」を、カレン語は「*Kr.*」を用いて表記した。なおタイ語は、タイ王立学士院が定めたタイ文字のローマ字表記法に従い、発音を写す転写を行った (Rachabanditayasathan 1999/2542)。カレン語は、タイのカトリック教会が用いるスゴー・カレン語のアルファベット表記法 (Joseph Seguinotte 2007 : p1-15 Basics of the Pgaz K'Nau Language) に従った。

と共生する知恵を持ち自給的に暮らすカレン」というイメージが強調されること（Atchchara 2009）とは対照的である。これはまさに宣教活動と開発が一体となって地域を形成してきたからに他ならない。

2. 北タイにおけるバプテスト宣教の広がりとボーケーオ地区の位置づけ

タイで宣教活動を行った最初のバプテスト派の宣教師は、ビルマで最も早く1828年に改宗したタヴォイ出身のスゴー・カレン⁵のコタビュに同行したキリスト教徒カレンだと言われている。その後、何度か白人やカレンの宣教団がタイでの宣教活動を試みるも、大規模な改宗には結びつかなかった。タイ国カレン・バプテスト会議（Thailand Karen Baptist Convention: 以下 TKBC）によると、1882年がタイにおいてバプテスト宣教が開始された時期である（TKBC 2008a: p4-5, Loo Shwe 1962）。ビルマ・バプテスト会議（Burma Baptist Convention）から派遣されたカレン人宣教師3名と、カレン人盗賊の首長で魔術の使いとして名高いモットウエ（*Kr. Mauz Htwei*）が、ランパーンのカレン村落3村で宣教を行い、500人の改宗者を得ると、モットウエが一人タイへ残り、1905年まで宣教に従事した（*ibid*）。

モットウエ帰国後、1909年に、ビルマからエネディワ宣教師（*Kr. Ai Neif Dif Wa*: 以下エネ宣教師）が派遣され、ランパーンのカレン教会で牧師を務めた。その後1911年には、エネ宣教師はチェンマイのドーイ・ステーブ麓に教育センターと宣教センターを設立して北タイの宣教に従事した。聖歌隊を組織し讃美歌の演奏に回り、ボーケーオを含む北タイ山地のカレン居住域を訪れ、人々をチェンマイに呼び寄せてカレン集落と教会を設立し、田畑を造成し自給的稲作に励んだ。しかし1920年代には焼畑が政府の反対を受け、最終的にチェンラーイのメーコック川沿いへと移転することとなり、多くのカレン信徒が各地へ散らばった。新転地チェンラーイへは、1910年から20年代に起こるランパーン周辺での飢饉と北タイ人人口の増加によって縮小傾向にあったキリスト教徒コミュニティから、カレン信徒も移住している。（*ibid*: p7-9）。

5 カレンと称される人々はスゴーとボーという2大言語グループを有す。その他にも多様なカレン語系諸集団も含み、言語学的に多くのサブ・グループを形成する。

チェンマイではその後も、ビルマ・バプテスト会議からポトゥ宣教師 (*Kr. Hpo Htoo*) やローシュウェ (*Loo Shwe*) 宣教師が派遣され、ボーケーオを含むチェンマイ北西部山地のカレン居住地で宣教を行った。また、この時期チェンマイでキリスト教教育を受けた若者の中には、後にワッジャン⁶で牧師となりTKBC 会長を務めるチェンラーイ出身のボニー伝道師⁷ (*Kr. Bau Neif*) がいた (*ibid*: p9-14)。1939年には第2次世界大戦が勃発し、ビルマからの宣教師の派遣は難しくなり、タイにおける宣教師の活動も徐々に規制の対象となっていく (*Hayami 2004*: p315)。多くの外国人宣教師が母国への帰国を余儀なくされ、ローシュウェ宣教師も1941年にはチェンマイへ移動し、1946年ビルマへと帰国した。

北タイにおけるバプテスト宣教の広がりとは、上記のランパーン→チェンマイ→チェンラーイ→ワッジャン、ボーケーオという系統の他に、ビルマのヤンゴン、パップン→メーサリアン→メーソットというもう1つ別の系統がある (図3)。メーサリアンでの宣教は1897年にはじまり、1910年にはメーソットでも宣教活動が展開されるようになった。1922年から第2次大戦の始まる1941年までメーサリアンではヤンゴン教会の支援の元で宣教師による学校での神学教育活動と、山地への伝道活動が展開された (TKBC 2008a: p12-14)。

第2次世界大戦によって一時中断された宣教活動は、戦後アメリカン・バプテストの支援の元でさらに広く展開された。そして1955年には、上述のような多様な設立背景とインフラの未整備の影響で、かなり自律的で独立した形態であった北タイ各地の教会が、TKBCとして1つの組織の元に統合される運びとなった。その後、各地の教会数や洗礼者人数は飛躍的に増加していく。TKBCにおける各教区 (*Kr. k'wauz/ Th. phak*) の設立年と教会数、洗礼者数の変化を

6 ボーケーオからさらに北西の山中へ直線距離で35キロほど進んだ場所。図3参照。

7 宣教師と伝道師という語句の使い方について。英語では前者を missionary、後者を evangelist と書くが、本論文では英語の2つを特に区別しない。主に外国人で外国の宣教協会などから雇われてくる人を宣教師、現地教会で雇われ村落などを回る現地人を伝道師と標記した (例えば、ビルマ・バプテスト会議からタイへの宣教のため派遣されたカレン人は宣教師と記し、タイ出身のカレン人がタイで宣教活動を行う場合は伝道師と記した)。カレン語でも厳密な区別はないが、前者はミッシヨナリー (*Kr. miv shef n'rif*) あるいはスラ/スラド (牧師/按手牧師, *Kr. s'raf/ s'raf dof*) と称されることが多く、後者はスラあるいはタムポ (使徒, *Kr. taj me hpau*) と表現される。

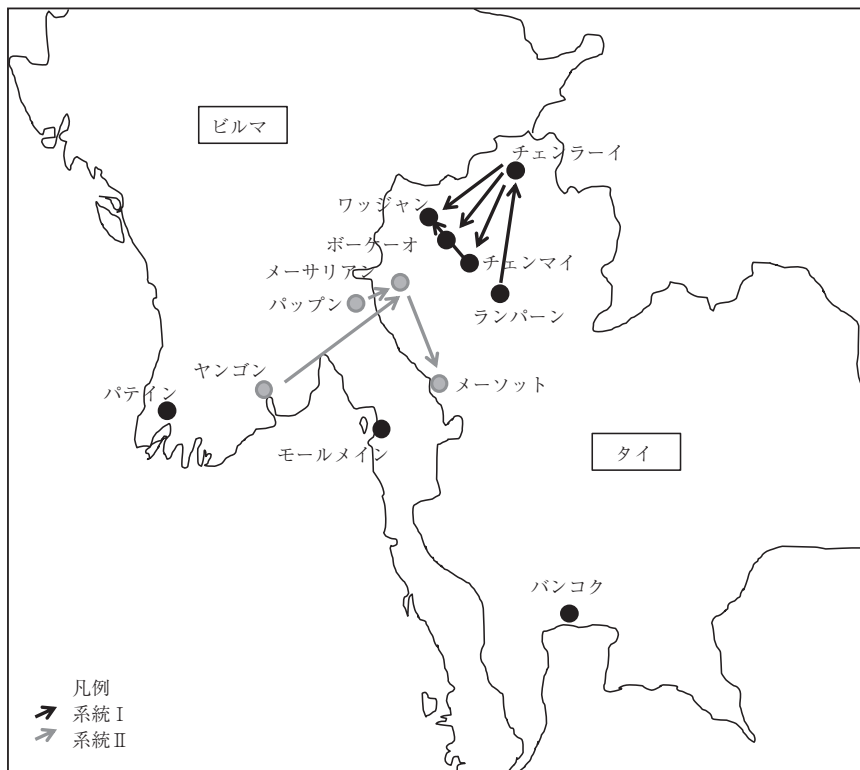


図3 ビルマからタイへのバプテスト宣教の空間的広がり

表1にまとめた。ボーケーオを含むチェンラーイ教区など4つの教区が1940年代から50年代に設立されている。さらにTKBCは、1965年までには2700人の洗礼者を得て、14人もの海外から派遣された宣教師によって3か所の学校、4つの宿舎、5つのセンターを中心とした農業開発プログラム、1つの病院(McCormick Hospital)、2つの診療所を運営した(Hayami 2004 : p318)。後述するが、ボーケーオでも1つの聖書学校が設立され(カレン語教育を行ったため2年後に閉鎖を余儀なくされた)、それに伴って寄宿舎が開かれ、また農業開発センターの拠点となり、診療所も置かれた。戦後TKBCが組織的な成長を遂げる中で、ボーケーオ地区はその中心地の1つとしての役割を果たすことになる。

表1 TKBCにおける10教区 (*Kr. k'wauz*) の設立年と教会 (*Kr. taj of hpgof*) 数、洗礼者数の変化

教区名 タイ語名 (カレン語名)	設立年	教会数 (1989→2010)	洗礼者数 (1989→2010)
1 : チェンラーイ (Sa Lof Nof)	1943	6→22	905→3377
2 : メーサリアン (Muj Yoof)	1947	10→25	1125→5521
3 : ワッジャン (Mu Hseif Hki)	1948	6→12	935→1864
4 : チェンマイ (Gij Mai)	1957	3→19	360→3453
5 : メーサー (Hsi Yof)	1968	4→資料なし	518→資料なし
6 : パーイ (Pa Pax)	1972	→11	→1686
7 : メーホンソーン (Maij Ho Hsau)	1995	0→15	→1933
8 : メーラノーイ (Moo La)	2002	0→6	→1092
9 : (Lej Hei)	2003	0→13	→1791
10 : メーソット (Beiz S'Lei Qeif)	2009	0→12	→1579

* 1980年のデータは Hayami2004 : p 318、2010年は TKBC2010 : pp 22-51より
筆者作成

* ボーケーオ地区は1のチェンラーイ教区に入る

3. ボーケーオ宣教史：宣教拠点としてのM教会の成立とM集落の形成

ボーケーオー帯をはじめチェンマイ北西部の山地では遅くとも18世紀から19世紀初頭には既にカレン系住民が暮らしていた (Renard 1980, 2001b)。村人によると、1940年頃まではほぼカレン系住民のみが暮らし、2～3戸から20戸より成る集落を水田のある川沿いに形成し、数年単位で家の移動を繰り返していた。

ボーケーオにおけるバプテスト宣教が1930年代に開始されると、1940年代前半にかけてビルマから派遣されチェンマイを拠点に活動していた宣教師やチェンラーイ出身の伝道師らが度々訪れ宣教活動を行った (TKBC2008a : p7-12)。宣教師は、改宗によってアヘン中毒からの更生をはかり、また多くの家畜を必要とする伝統儀礼を放棄して貧困から脱却した良い生活を目指そうと説得した。生活に困窮した人々がこれに応じ、1930年代に地域で最初の3家族が改宗したと言われる。1941年に第2次世界大戦が始まると、ビルマから訪れた宣教師らは帰国を余儀なくされる。以降一人のカレン人キリスト教徒がメーター集落に滞在して宣教にあたったが、しばらくすると1家族だけをメーターに残して、

改宗したその他の家族とともにチェンマイへ移住した（Ro lai 年代不明）。

1946年になると、チェンラーイからカレン人伝道師フミヤ（*Kr. N'hei m'yaz*）が、ボーケーオ盆地とメートー集落での宣教を担当するべく遣わされた（*ibid*）。当時の改宗者とその家族は、改宗したために村八分に遭い、周囲を転々としていた。1946年、フミヤ伝道師とキリスト教徒の家族は現在小・中学校のある地にM教会（*Kr. taj of hpgof Taj Muj Laj Hki*: 希望の水源地教会）を設立し、キリスト教徒3家族が、それまで精霊の地として恐れられていた教会下の土地メニヤハデへ移住し、フミヤ伝道師とともに居を構えた。これがM集落の始まりである。後の1955年、ボーケーオがメーリム郡メーサップ行政区から独立しサムーン郡ボーケーオ行政区になると、最初期にM集落に移住した家族のキョウダイである男性ラポウェが、このM集落を含む第4行政村の村長かつ初代ボーケーオ行政区長（*Th. kamnan*）に就任した。このように、M集落の創成自体がキリスト教への改宗によるものであった。その後、1970年まで24年間に渡りM教会の初代牧師を務めたフミヤと初期改宗者家族を中心に、M教会とM集落はボーケーオ行政区における中心地として、発展の一途を辿ることになる。

1952年にボーケーオを訪れた長老派の宣教師ファン・ベンスコテン（*Alfred A. Q. Van Benschoten J. R.*）は、ボーケーオに一人のカレン人福音伝道師がおり、カレンの人々の改宗の理由は悪霊への豚や鶏の供犠やケシによる貧困に飽き飽きしたための改宗、だと記している（*TBMF* 1953）。そしてこのように山中でキリスト教徒を発見し歓喜した彼は、“there is a turning to the Lord”と書き *Thailand Missionary* へ報告している（*TBMF* 1954）。レナードによると、この報告が契機となって1957年にはM集落から徒歩30分のところに、カレン文字の識字と聖書教育のための宣教ステーションが設立された（*Renard* 1988 : p 78-79）。1956年から2年間米人宣教師クリスター（*Christer*）が、ボーケーオの最初の改宗者宅に居住しながらカレン語やカレン文化を学ぶが、1957年には帰国の途についている。同じく1956年から米人宣教師コンクリン夫妻（*James E. Conklin and Idaleen Conklin*）がボーケーオへ赴き、M集落の村人の家や後には宣教ステーションに泊まりながら、教育センターの設立とカレン文字識字教育、神学教育に努めることとなった。翌1957年には、後に十年以上ボーケーオに居を構えることになる米人宣教師ディカーソン夫妻（*Thomas Bennett Dickerson and Doris Dickerson*）が最初にボーケーオを訪れており、M集落は6戸のキリスト教徒か

ら成っていたと報告している。夫妻の活動内容については後述するが、カレン文字や神学教育はもちろんのこと、村人の生活向上、女性労働への着目と教会婦人会による生業推進に力を入れている。

1958年、コンクリン夫妻やディカーソン夫妻ら米人宣教師、チェンラーイ出身のカレン人牧師・伝道師ら、そしてM集落の村人の尽力によって、M集落に Karen Leadership Training Center が設立された (TKBC 2008a, Ro lai 年代不明)。村人によると、この教育センターは、竹で造られた3つの教室と調理場と女性宿舎から成り、ビルマから呼び寄せた3人のカレンが教員として常駐した。教育では3年間の課程を予定し、カレン語の読み書きと聖書の勉強を基本に農業や音楽など他の科目もあったという。ボーケーオとワッジャンから40人の生徒が勉強にきた。主にコンクリン夫妻やディカーソン夫妻が本国アメリカから寄付を募り、教員の月給を支払ったという。M集落の村人も米を拠出して支援した。しかしセンターは、ビルマ出身のカレン人教師によるカレン語教育を行い、タイ国旗の掲揚を拒んだため、タイ語教育による山地民のタイ国家への包摂を目論む政府の反対に遭い、1960年に開校わずか2年で閉鎖を余儀なくされた。閉鎖された教育センターは、建物はそのままに、政府主導でタイ語教育を行う小学校として1960年に再び開校されている。

さらに1958年には、ボーケーオで亡くなったコンクリン夫妻の娘ルイス (Lois Conklin) を記念して、チェンマイのメコミック病院 (McCormick Hospital) チームや看護学生がボーケーオを訪れ、地域の医療の拠点となる診療所 (the Lois Conklin Memorial Health Center) を設立する。診療所は、M集落から徒歩30分約2キロの距離にあり、後に宣教ステーションも建てられたボーケーオ盆地の中央が建設場所として選ばれた。以降、ボーケーオでは病気の治療はもちろんのこと、子どもへのワクチン接種や女性のピル飲用による産児制限と家族計画が可能になる。

ボーケーオのM教会そして信徒によって形成されたM集落は、1950年代に鉱山採掘のため敷設された車道に沿っており、この車道は後にチェンマイからサムーン、ボーケーオ、ワッジャンを経由してパーイへ抜ける幹線道路となった。交通の利便性と宣教団や政府による教育や医療の提供によって、M集落への移入者は1960年代後半から増え続け、ボーケーオ行政区発展の要となっていく。

さらに比較的早くから宣教が開始され拠点となってきたために、村人の高学

歴化が進み（M教会による就学支援については田崎 2016参照）、改宗第2世代は、後に指導的立場から地区全体の宣教を担うことになる。ボーケーオ地区における9箇所の教会の設立に寄与した各教会の初代牧師は、5人がM集落出身/在住者であり、ボーケーオ地区内で2番目に設立されたベサニ教会の牧師は、M集落出身者でこの地区で唯一の按手牧師でもある。ここからも、地区におけるM教会の中心性や指導的立ち位置が窺える。

以上みてきたようにボーケーオでは1940年代後半から50年代にかけて、米人宣教師らとチェンラーイ出身のカレン人伝道師ら、更にキリスト教に改宗したカレン人信徒の村人が中心になって、宣教拠点としてまずM教会が設立され、同時に教会の周りに信徒の居住場所としてM集落が形成され、続いて学校や診療所、外国人宣教団の居住する宣教ステーションが次々に建設されていった。ボーケーオは、北タイにおいては比較的早い時期から、ランパーン（1800年代）、チェンマイ（1911年）、チェンラーイ（1920年代）、ワッジャン（1934年）、メーサリアンに次いで、教会（*Kr. taj of hpgof*）が立ち上がり20世紀後半の一大宣教拠点となった地域でもある。このように形成されたM教会と信徒の集団が、バプテスト派の1つの中心地としてボーケーオ地区の他教会の形成にも貢献した。

4. 宣教活動と開発プロジェクトの相互作用

本節では、主に米人宣教師やTKBCによって書かれた報告書や論文、行政文書を元に、1950年代後半から90年代に至るまでボーケーオで行われてきた教会をはじめ行政や国際NGOなどそれぞれが主導した多様な開発プロジェクトの内容を明らかにする。そして、それぞれの機関による活動が積み重なって相乗効果を生み、換金作物を大々的に栽培する現在の生業の基盤を形作ってきたことを示す。

4-1. 1959-72年：宣教師ディカーソン夫妻による教育・生活支援と女性労働への着目

米人宣教師・按手牧師ディカーソンとその妻ドリスは、1957年に渡タイしカレン語を学んだ後、1959年以降ボーケーオに居住しながらボーケーオやワッジャン、メーサーといったチェンマイ県の北部で活躍した。1973年以降はチェンマイのシーロアム聖書学校に活動の拠点を移すものの、1982年にサンクラブリ

ーでの宣教に従事するためタイ国西部へ移動するまでボーケーオでの活動に関わり続けた。

夫妻はそれぞれ神学と宗教教育学の修士号を持ち、まずはワッジャンのティメグラ集落の私立学校（現 *Th. rong rian sahamit withaya*）の設立に従事した（TKBC 2008b：p10）。妻ドリスは、特にボーケーオでキリスト教教育を含めた教育全般に力を入れ、1960年代には初等教育用の宿舍を改築している。女性教育の分野では、1960年代当時、木曜女性教室で、聖書、健康と子育て、洋裁、料理、公民権教育が教えられ、10週間で5村から42名の参加があった（Dickerson 1965-66）。彼女は、教育され訓練された女性リーダーによって、改善されたクリスチヤンの家族生活が営まれることを目指しており、婦人会の活動が教会生活に大きく影響を及ぼすと考えていた（*ibid*：p3⁸）。夫妻はまた、生業に関して多種類の野菜や家畜を導入し、レンガ造りの井戸を掘削し、家庭菜園作りや換金作物の販売方法を教えた（*ibid*：p1-2）。特に改良品種の豚の飼育、金時豆とコーヒーの栽培が促進され、合わせて千ドル以上をもたらした（Dickerson 1973：p32）。さらに生業活動で得た現金を教会献金（*Kr. taj maz boof*）として献げるよう説いた（TKBC 2008b：p10）。

夫ディカーソンは1967年コーネル大学に修士論文を提出し、自らの布教活動

8 例えばスワンソンは19世紀末から20世紀初頭にかけて北タイで活動した米国長老派宣教団の女性観がもたらしたタイ人改宗者女性の新しい宗教的・社会的役割について考察している（Swanson 1988）。背景には、当時アメリカで流行していた *true womanhood* 運動があり、そこではキリスト教的価値と男性の本来の暴力性を前提として、女性は信心深く道徳的で穏やかな家庭を通して男性と子どもを市民化させる任務を宗教的に担うとされていた。そして、こういった女性教育を受けた女性が活躍する場として、海外宣教が位置づけられていたという。宣教師の目には、母系のタイ社会では女性の役割が重要だとうつり、「キリスト教徒コミュニティは教育されたインテリのキリスト教徒女性が必要であり、彼女たちがキリスト教徒家族を育て、非キリスト教徒の夫を改宗に導き、キリスト教徒男性に相応しい妻となると信じていた」（*ibid*：p193）。宣教団は改宗した女性とその娘の家を拠点とし、後に改宗女性たちは教育を武器に教師となり、初の女性給与生活者となり、村のリーダーとなったと報告している。スワンソンは、当時の米国長老派宣教団は家庭を女性活動の主な領域として位置づけ、それによって新しい社会的宗教的役割を学ばせることで、宣教活動を軌道に乗せようとしたのだ、と論じている（*ibid*）。時代は少し前後するが、ディカーソン夫妻もこういった活動が頭にあったであろうと推測される。

の経験から、キリスト教徒の方がアニミストのカレンよりも、コーヒー栽培や家畜の予防接種、避妊のための予防接種、羊や馬の飼育、トタン屋根の導入とそこから雨水を得ること、洋裁、健康診断、果菜園の柵囲いといった技術革新を受け入れる割合が高いことを論じた (Dickerson 1967)。また、夫妻による1973年の報告書では、農業は伝統文化と葛藤を起こしながら少しずつ改善されていくことを指摘した。彼らのいう伝統文化とはすなわち、「野菜畑の収穫が遠慮なく他人と共有される」ことであり、「(柵に) 囲われていない鶏や豚、牛、水牛といった家畜が野菜を食い荒らす」ことであり、こういった伝統を変化させるためにも指導に当たったことが伺える (Dickerson 1973: p30)。以下で述べるTKBCのVillage Upliftプロジェクトでは、このような指摘に呼応するように生活改善の指導が行われている。更に、女性を対象とした朝の教室では、9村から女性を集め、聖書の勉強とともに縫製、栄養学、養育、農業などを教えていた。集まる多くの女性の夫や父親はアヘン中毒者であるが、「彼女たちにとって、人として愛され、自身の能力や可能性を知ることとはとても重要である。彼女たちは生活向上を強調するこのレッスンによって、夫や(劣悪な)生活状況に立ち向かい、危機を回避することができる」と記述している (ibid: p30: カッコ内は筆者による追記)。続いて女性による織物がチェンマイで市場を得ている報告と、それがタイのカレンの中で初めての成功を収めていることの喜び、カレン自身も成功をととても喜んでいることが感嘆符付きで述べられ、「未だ男性の前で意見することを良しとしないカレン文化の中でこれこそが神のための労働だ」と称賛を送っている (ibid: p30-32)。これらの資料から、夫妻が家族の生活向上における女性の役割と労働を重視して宣教活動にあたっていたことが分かる。

M集落では現在でも彼らの教室に通い、裁縫や賛美歌などを習ったことを楽しい思い出として語る女性がいるほか、ディカーソン夫婦がチェンマイやチェンラーイなど他所へ伝道に赴く際に同伴して歩いた未婚時代に、当時としては珍しかったであろう町や遠方の村での生活を通して様々な経験をしたことが語られている。

70代女性S:

「(ディカーソン夫妻は) 男には農業を教え、女には教えなかった。女には健康・食事・清潔・洋裁・文字の読み書きや聖書・賛美歌を教えた。例えば家の

周りに家庭菜園を作ること、豚肉は1週間に1回食べること（そのようにして多品目の栄養をとること）、腐ったものは食べないこと、毎日家を掃くこと。それまでは家を掃くことなんて知らなかったし、とても汚かったよ。宣教師は、既婚女性が子や夫のために家を清潔にすべき、と考えていた。育児も宣教師の家では女が家に居て子どもをみた。」

70代女性 N :

「洋裁を習いに行くのはとても楽しかったよ。終わると縫いあがった服を2着、3着、子どものために持って帰っていいって言うんだ。それから（カレン）文字を学んだことも嬉しかった。何の本でも読むのは全て楽しかったけれど、特に聖書を読めて嬉しかったよ。」

60代女性 P（未婚時代、ディカーソン夫妻に雇われ宣教センターの隣の家に寝泊りし、家事を手伝っていた女性）：

「女は家に居なければならない。家事をするから。ママ・ディグス（ディカーソン妻）もこうしていた。スラ・ディグス（ディカーソン夫）は村の外に仕事に行くときに『ママの言うことをよく聞きなさい。自分は家にいないから』と子どもに言い聞かせていた。私も夫が村外に行くとき子どもに同じように言い聞かせた。」

村人の語りからは、婦人教室がとても楽しかったこと、また男女の役割分業をディカーソン夫妻にならった様子が窺える。

このように、1960年代前半までは大規模なプロジェクトこそないものの、ボーケーオに居住するディカーソン夫妻を中心に宣教団によって様々な物資や教育、多様な作物栽培が持ち込まれた。中でも家族生活を支えるものとして、夫妻は婦人の家事労働と農業労働、織物生産に期待をし、女性を対象とした教室を多く開催する中で、西洋的な婦人像の元に教育を行った。

4-2. 1965-75年：TKBCによる2つの村落開発プロジェクト

TKBCは1965-70年と1971-75年に2つの村落開発プロジェクトを実施している。それぞれの特徴を反映して前者はVillage Uplift、後者はFishing in Deep Watersと呼ばれる。1956年からボーケーオを訪れ一時期居住もしていた米人宣教師コンクリン（James Conklin）は、宣教学の博士論文で、1960年代後半から70年代にかけてカレンの伝統的世界観に基づいた新たな福音伝道方法を模索

する TKBC の過程と合わせて、この 2 つのプロジェクトを評価している (Conklin 1984)。コンクリンによると、当初宣教団が行っていた伝統的な福音伝道では、カレンが経済的困難や災厄を逃れるために改宗しようとするに対して、宣教団側はそうではなく改宗には洗礼の理論的な意味を理解することが必要だと考えていた。しかし、西洋的な説教はカレンに通用しない。宣教団は徐々に、キリスト教徒村において公共福祉、教育、農業技術などの改善を具体的に目に見える形で示すことが、非キリスト教徒に対してもキリスト教の必要性を明瞭に示すことになり、必然的な改宗につながる、と考えるようになったという。そして、まずは「キリスト教徒カレンの村を、外見で非キリスト教徒と区別でき… (省略)、キリスト教徒としての品位や高潔性を示す証として、祈禱所や秩序だった行動、清潔さ、安全性、繁栄などを目指して改善していくことが計画された」(ibid: p54)。

それが1965-70年に実施された Village Uplift である。このプロジェクトで TKBC は、チェンマイの聖書学校で農学や聖書など伝道の基礎を学んだカレン人指導者を山村に送り込み、自給自足支援や生活の質の向上を図ることに焦点を置いた。ボーケーオを含む当時の山地の宣教中心地では、15名の若い農業指導者が、①食生活の向上 (食事の品数の多くなかったカレン社会に多様な野菜を植える家庭菜園作りを推奨、米の品種改良)、②人々の健康および家畜の生産性の向上 (養魚池の導入、生産性の高いハイブリッド交配した鶏・豚・牛の導入、医療箱の設置と救急知識の教育、井戸の掘削)、③経済の多様化、④村を物理的に安全で秩序立ち、健康で美しいものへと改善すること (家屋と家畜小屋の柵の設置、トイレの設置)、に当たった (ibid: p53-56)。こうして、キリスト教徒の村であることが外側から見ても明瞭に分かるように整えられていった。コンクリンは、「キリスト教徒が生活の様々な必要性に対処しているその方法自体が、キリスト教を信仰することの意味を行動で示している」(ibid: p55) と考え、発展したキリスト教徒の村で映画を繰り返し撮影した。撮影の主題は、井戸掘りによる飲料水の確保、棚田作りによる増収、コンポスト作り、牧師と医療箱による病の治療、祈禱会、村や教会への献身、スポーツ、組織のミーティングなどであり (ibid: p55-56)、特にこの時期ボーケーオを度々訪れていたであろうコンクリンの撮影対象の1つがM集落だろうこと、M集落の暮らしがこういった目的に向かって整えられていったであろうことは想像に難くない。コンクリンが目指したの

は、技術的行為によって生活改善を行い、キリスト教徒としての外形を整えることであり、個人的・内面的な信仰ではない。

その後1970年頃を境に、TKBC による山地での宣教活動は、TKBC 本部から派遣された医師や農業技術者といった専門家である白人やカレン人指導者層を山村に送り込む形態から、ローカルな教会の役割を増しローカル・レベルでの指導者の育成と信徒の宗教理解の深化を図り、彼らが周辺村への布教を先導できるような形態へと変容していった (ibid: Ch4)。それが、1971年—75年に実施された Fishing in Deep Waters である。ここでは、教会員全員が福音伝道の責任と義務を担うことが目指され、キリスト教徒としての美德や信仰の深さは洗礼後徐々に獲得されるものだとして、新洗礼者の生活に際しては先輩キリスト教徒の日々の務めがその模範となるべきことが目された (Conklin 年代不明)。ボーケーオではこの時期青年会の活動が活発化し、近隣村へ讃美歌斉唱や行事のために出かける機会が多くなり、現在に至るまでの教会活動の実質的な中心をなす、若く新しい考え方をもった教会指導者が誕生していく。

4-3. 1971年—：国連主導プロジェクト HAMPとボーケーオの農業技術センター

1971年タイ政府が反共政策のため国連との共同で山地開発に乗り出し、TKBC も国連の援助を必要としていたためにこれに加わった。それがこの HAMP プロジェクト (Thai/ United Nations Highland Agricultural Marketing and Production Project) である。1959年にアメリカから渡タイし、以来 TKBC と連携しながら山地の農業・養殖技術指導に当たってきた農学修士マン (Richard Mann) が、HAMP の相談役を務め、山地農業に桃や金時豆をもたらした (TKBC 2008b: p12-15, Renard 2001a: p57-60)。マンはチェンマイのカレン・バプテストによる指導者養成センターである CUHT (Center the Uplift of Hill Tribe、現シーロアム聖書学校) 付近に農業試験場を開設し、山地でも可能な養魚・養鶏・養豚技術を開発した。例えば、養魚のため産卵を成功させ山地に稚魚を配布した。また赤色鶏を導入し、宣教師ネルソン (Rupert Nelson) を中心にしてチェンラーイで豚の改良品種の導入に取り組み、ワッジャンでは防寒具を目的とした羊毛のための養羊の導入を試みた。さらに、アメリカから持ち込んだ栽培品種、特に短期で収穫可能で乾燥耐性を持ち高収量のトウモロコシなどの導

入など多様な換金作物の栽培を試み、稲作への施肥も行った（Mann 年代不明）。そして山地からチェンマイの試験場に村人が見学・研修に来られるようにしたことに加えて、ボーケーオにもマンの指導する農業・養殖研修場の1つを設置した。ボーケーオの研修場は、以下1980年代後半の TN-HDP 時代、92年以降の TKBC による麻薬撲滅プロジェクトにおいてもボーケーオ地区の農業技術センターとしての役割を果たしてきた。HAMP では、反共政策の一環として山地でのケシ栽培の撲滅と代替作物栽培の推進が試みられ、マンの技術が頼られた。現在でも高齢のマンは妻とともに1年の数カ月をボーケーオの農業センター兼自宅で過ごす。マンの妻マレーナ（Marlene Mann）も宣教師として教会婦人部の活動に貢献し、特に織物の生産と販売を振興した。消費者に評判も良く、織物はその後の婦人部の活動の一つの柱となり、現在では夫妻の子どももそれぞれが宣教活動に就くようになったという（TKBC 2008b；p12-15）。

さらに1965年には、コミュニティの農業プロジェクトのための資金源として循環貯蓄（revolving fund）を設立し、数家族が信用貸しによる利益を受けた。融資は、ローカルな農業委員会の承認をとおして行われ、3年ローンで、1年の利子は3%と定められた。家族への融資のほか、ワッジャン教区とチェンラーイ教区では灌漑プロジェクト用の融資も承認された。

4-4. 1986-90年：山地開発プロジェクト TN-HDP

「タイーノルウェー教会支援による山地開発プロジェクト（Thai - Norwegian Church Aid Highland Development Project 以下 TN-HDP）」は、タイ政府からは公共福祉局（Public Welfare Department（PWD））と薬物取締委員会（the Office of the Narcotic Control Board（ONCB））が、またノルウェー教会支援（Norwegian Church Aid（NCA））も参加し、国連薬物乱用統制基金（UN Fund for Drug Abuse Control（UNFDAC））の支援の元1986年に開始され、1990年まで5年間続いた。その目的は、山地で当時大きな現金収入源であったケシの栽培面積を減らし、ケシ代替作物の栽培を推進することで山地の生活向上を図り反共の砦とすることであった。3つの山岳地域が選定され、その1つボーケーオ行政区はモンヤ・プロジェクトと名付けられた。モンヤ・プロジェクトでは北タイ人集落を除いた2つのモン（Hmong）集落と18のカレン集落が対象として選ばれ（M集落含む）、プロジェクト開始1986年当時の対象世帯数は535世帯、人口3651人となっている。

2つの支部がモン集落パグギアとカレン集落メーカプーに置かれた (Hill tribe Research Institute 1985)。

ボーケーオでは、上記 HAMP にも深く関わり TKBC から派遣された米人農業専門家マンやミャンマー出身のカレン人宣教師ヌアを中心に、村人による委員会が組織され、TN-HDP が実施された。M集落では初めてのタイ語教育世代で結婚し家庭を持ち始めていた当時の20代世代が委員の多くを務めた。

1986年前期の報告書 (TN-HDP 1986) によると、農業拡大と共同体開発部門では①農業用地改良・農業用水確保として、農地における土壌肥沃度の向上、土壌侵食防除、農業用水確保が、②農業生産拡大として食糧生産の増進、短期的な換金作物の導入、果樹導入による土壌の向上と農業用水の確保が、③森林保全として森林保全、水源・共有林・経済林・薪林における植林が、④家畜増産として自給用家畜生産の増産と現金収入源としての促進が、⑤換金作物生産のための貯蓄グループ設立と共同の形成が行われた⁹。また、共同体・村落開発部門では自助活動促進、貧困者支援のための公共基金への支援、顕著なグループ活動への報償が行われた。モンヤ・プロジェクトでは主にコーヒー果樹栽培と土壌肥沃度促進のための金時豆 (red kidney bean) 栽培が推奨され、コーヒーは20万本の苗が栽培され実のなりも良かったが、プロジェクトによる生産物の購入量はとても少なく、市場開拓がうまくいかなかった¹⁰。筆者による聞き取りでも繰り返し述べられたが、これが村人のモチベーションを下げる1つの要因となった。そしてプロジェクトと機を一にして北タイ人によるイチゴ栽培がもたらされると、はるかに収入の高いこのイチゴ栽培が瞬く間に広まり (田崎 2018)、TN-HDP の換金作物がボーケーオ地区に定着することはなかった。しかし、こ

9 報告書にはこう記述されているものの、村人は当時貯蓄グループを形成したという認識はない。村人が言及する初の貯蓄グループの形成は、パーヤップ大学支援の元で行われる1994年の貯蓄グループと女性グループである (後述)。

10 マーケティング部門における活動報告書 (TN-HDP 1986) より、メーカプー支部とパグギア支部でのプロジェクトによるコーヒー豆の購入量は、総計23キロで生産量全体の1%にも満たない。プライベート・セクターによる購入も240キロで全体の3%未満であった。金時豆のプロジェクトによる購入量は総計約900キロで生産量全体の約2%、プライベート・セクターによる購入が9900キロ (全てパグギアから) で全体の約23%となっている。つまりプロジェクトによる購入はわずかでほとんどがプライベート・セクターに依っており、また生産もモンのパグギア支部に集中していた。

表2 モンヤ地域で TN-HDP によって開催された1986年上半期の研修会

研修会名	開催場所	開催月日	モンヤ地域の参加者数
コーヒー栽培研修会	メーカブー村	2月7日	58人
農業スタディ・ツアー	他地域へ視察	2月12-15日	52人
農業拡大とコミュニティ開発研修会	メーカブー村	3月13日	62人
食糧生産研修会	メーカブー村	4月10日	67人
換金作物研修会	メーカブー村	5月8日	49人
森林管理研修会	サムーン郡森林局	4月24-25日	10人
リーダーシップ研修会	チェンマイ大学	5月11-23日	

出典) TN-HDP 報告書 (1986) より筆者作成

の時期に現れる農地改良や農業用水の確保の概念と技術、森林保全の概念、換金作物栽培のための貯蓄グループの形成などが後のイチゴ栽培の受容や北タイ人との関係形成に役割を果たしただろうことなど、間接的な影響は重要だったと考えられる。

さらに、教育・広報部門による活動報告書を見ると、1986年前期の半年間でメーカブーでの農業研修会が4回、他所でのスタディ・ツアーなどの研修会が3回行われており(表2)、プロジェクトの委員などはこの時期頻繁に村外を訪れる機会があったことが分かる。このように見聞を広める機会が多くもたらされたこと、彼ら委員が村で初めてのタイ語教育世代であり TN-HDP をきっかけに外部世界と村を連結する役割を担うようになったことなどから、彼らは徐々に村の政治・経済の中心として頭角を現した。後の1992年には村落規範設立の中心人物となり、またイチゴ栽培の拡大に伴う初めてのカレン人世話役を担い、2000年代に入ると村長や行政区委員長を務めるようになり、現在に至るまで村の政治・経済の中心をなしている。こういった機会がイチゴ栽培の導入を容易にした、とも言える。

4-5. 1994年ー：貯蓄グループの設立と貯蓄概念の形成

貯蓄グループの設立

1965年農業指導者マンの指導の元で、ボーケーオではないが北タイの他地域のカレンの間では循環貯蓄グループが結成され、マイクロファイナンスが試みられる。さらに1986年、マンの指導する TN-HDP において、ボーケーオでも貯蓄グループが形成されたという報告がある (TN-HDP 1986)。しかし、ボーケー

オでの宣教活動中心地M集落において、村人が貯蓄グループを開始したと認識しているのは、これらより更に後、イチゴ栽培が村に浸透して以後の1994年、パーヤップ大学研究チームの農村でのマイクロファイナンス支援のための訪問を契機に、貯蓄のための女性グループ (*Th. klum mae ban*) が設立された時である。1994年には同時に、男性のための貯蓄グループ (*Th. klum aum sap*) も設立され、後者は主にイチゴ栽培用資金として運用されていた。当時のM集落を取り巻く時代背景として、1991-92年には加工用イチゴ46番品種の栽培がボーケーオでピークを迎え、1992年にクン・カーン国立公園 (*Khun Khan National Park*) の設立が取沙汰され、村落規範を規定したばかりだった。また村人の記憶によれば、94年以前は、教会組織を中心とした米銀行、水牛銀行が運用されていた。

2つの貯蓄グループは、当時の村長助役が村人とともに大学の仲介を得て設立したという。男性のための貯蓄グループには11名の会員がいたが、数年で解散した。女性グループは現在まで女性のための貯蓄グループとして機能している。

現在の女性グループの形態と活動内容

女性グループへの参加は既婚・未婚を問わず女性に限られ、2009年現在の会員数は81名であり、18歳から70歳と幅広い年齢層をカバーする。会員は家族単位ではなく個人単位であり、M集落の村人だけでなく同じ第4行政村である他の3つの集落の村人も含む。女性たちは、少額でも毎月の貯蓄によってまとまった額を手に入れることができるようになると教えられ、結成と同時に行政機構である郡の共同体開発局 (*Th. krom phatthana chumchon*) による支援と研修も始まった。中心的役割を務める村人は時折郡役所で研修を受け、毎年パーヤップ大学に報告に行った。設立当初の目的は村人が貯蓄の方法や有効性を知ることであり、貯蓄した現金を何かに使うということではでなかった。しかし、徐々に行政が生業支援のため女性グループの貯蓄活動を役立てようと目論むようになり、織物生産やイチゴ栽培の運転資金捻出のための貯蓄に変容していったという。1997年の経済危機以後は特に生産性の高いイチゴ栽培のための貯蓄に特化していった。とはいうものの、現在の会員をみると少数ではあるが公務員や商店経営者、出稼ぎ者なども登録しており、貯蓄の用途は会員個人に任さ

れている。

40代の現グループ長は、女性グループの意義を以下のように述べている。

「グループ設立以前は、現金は誰かのものを借りることしかできなかった。そのため、私が大病を患い多額の入院・手術費用が必要になった時には、他家に頭を下げて回り、現金を請わねばならなかった。しかし、お金持ちであることがこちらに十分分かっているような人ですら、病気の私に金を貸しても返却されないだろうとの思いから断られることが多く、辛い経験だった。それが女性グループ設立によって、誰かのものを借りることなくまとまった現金を手にすることができるようになったのだ。だからこそ、私はもう誰も私のような思いをしなくても済むようにと願っているし、講習会に出かけ簿記の勉強をして、会計からグループ長を務めるようになり、村人の貯蓄の手伝いをしているんだよ」。

彼女は現在でも無報酬で女性グループの帳簿をつけ、会員から現金を預かって銀行へ貯蓄するという仕事を引き受けている。また、こういった仕事に携わり女性でありながら村社会に貢献することが彼女のアイデンティティの重要な一部分になっている。

さらに彼女の言うとおり、1980年代頃までは貯蓄と言っても象や水牛、牛、豚といった大型家畜を飼育し、必要な時に売却して現金を手にすることが一般的だった。1980年代当時日常的に用いる現金はボーケーオ鉱山や上流の森林局へ日雇いに出て獲得し、その日の内に塩漬鰯や鶏肉、タバコなどを購入して家族で分け合うことが習わしであった。現金は使うものであり、手元に貯めておくという観念はなかった。女性グループ長が話すように病や就学などまとまった現金が必要になる際には、大型家畜を所有していないものは、現金を捻出することは不可能だった。その中で、換金作物栽培が増加した1980年代後半から1990年代前半に、村人が現金を貯蓄し用いるという概念を学んだのがこの貯蓄グループの形成であり、直接的な契機となったのがイチゴ栽培の浸透による現金収入の増加とパーヤップ大学によるグループ形成支援である。またそれを支える背景が、マンの指導するそれ以前のキリスト教関連プロジェクトであったと推測される。

5. 結論

本稿では、タイにおけるバプテスト宣教の歴史の中にボーケーオ地区とM教会を位置づけ、調査地が第2次世界大戦後には宣教ステーションとして、北タイのカレンにおけるバプテスト宣教の中で重要な役割を果たし、様々な開発プロジェクトの対象地域となってきたことを示した。図4に1950年代以降にボーケーオで行われてきた各プロジェクトの出所と、それぞれのプロジェクトが取り組んだ分野や活動の強調点を示した。第4節で述べたように、ボーケーオでは1960年代頃からの宣教活動を中心として、女性労働を中心とした生活改善指導や労働生産性の向上、キリスト教徒としての概観を整えるための経済力向上が目指され、その主力としての換金作物栽培が村の生活を大きく変容させてきた。特に1960年代後半以降、ボーケーオは主に3つの農業関連開発プロジェクトの対象地域となり、バプテスト教会やタイ政府をはじめとする外部機関がこれを実施した。その結果、①女性労働の重視と、自給的な生活だけでなく換金作物栽培や織物などによる現金収入源を求める生活スタイルの形成、②外部への農業研修や他村視察などによる教育機会拡大と外部社会との連結・協同の可能性の開拓、③新しい技術や概念を受容し活用する素地の形成、④貯蓄グループの結成に伴う貯蓄概念の誕生、という多角的な影響が指摘できる。こういった影響は、後に村人がイチゴ栽培にとりかかることを容易にもし、拝金主義的で勤勉を強制されるかのような「カレンらしからぬ」と揶揄されることにもなる当地独特の労働スタイルや外部社会との関係性を身につけるためにも役立った。

現在のボーケーオ地区は、教会主導の開発と行政や国際 NGO による開発プロジェクトが相互に乗り入れ、車の両輪のように入れ子状になり相乗効果を生み出す中で形作られてきた。そして、それが信徒の日常生活や労働スタイルに影響を及ぼし、他地域と比較してのボーケーオ地区の特徴を大きく規定してきた、その可能性を、本稿では主に宣教側の資料から明らかにした。

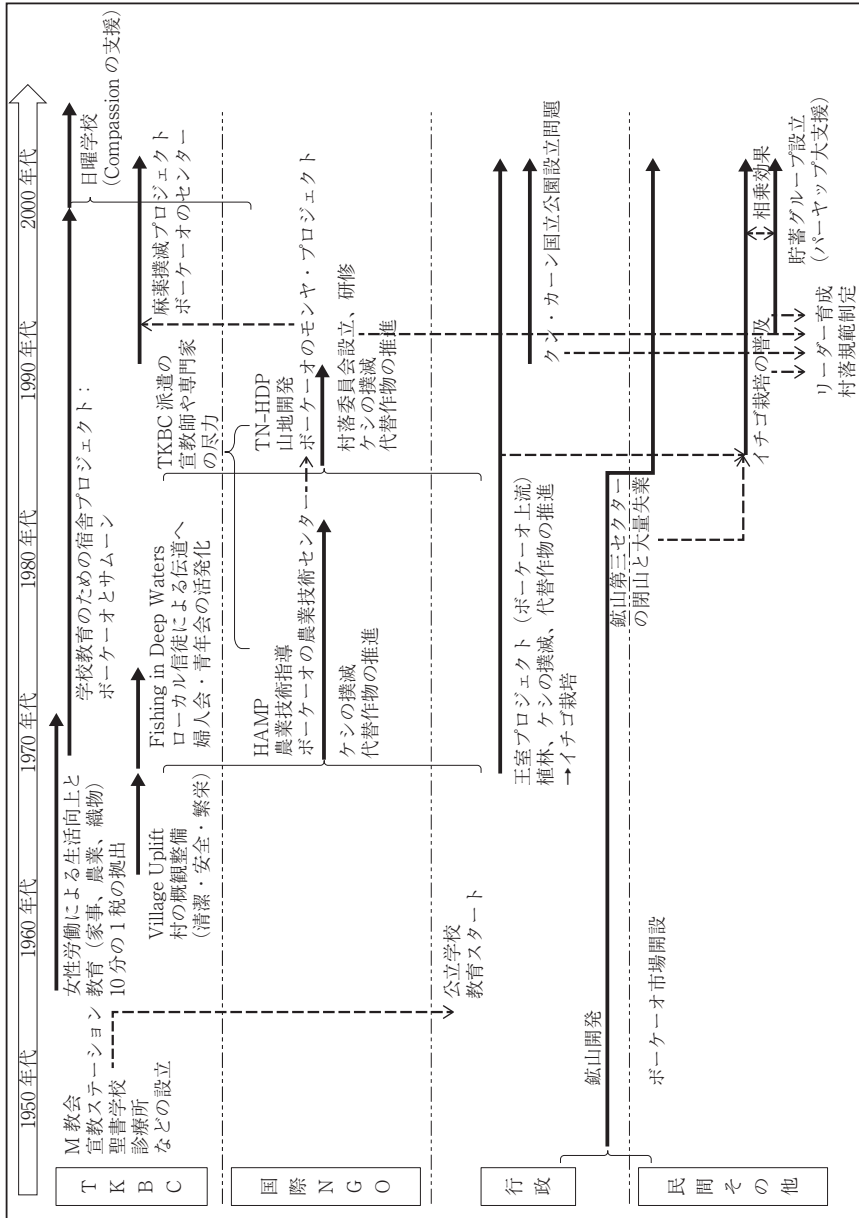


図 4 ボークーオにおける宣教活動と開発プロジェクトの相乗効果

参考文献

- Atchara Rakyutidharm. 2009. *Constructing the Meaning of Land Resource and a Community in the Context of Globalization*. Ph.D. Dissertation. Chiang Mai University.
- Comaroff, John L. and Comaroff, Jean. 1991. *Of Revelation and Revolution, volume 1: Christianity, Colonialism, and Consciousness in South Africa*. Chicago: University of Chicago Press.
- . 1997. *Of Revelation and Revolution, volume 2: The Dialectics of Modernity on a South African Frontier*. Chicago: University of Chicago Press.
- Conklin James. 1984. *Worldview Evangelism: a Case Study of the Karen Baptist Church in Thailand*. Ph.D. Dissertation. University microfilm international.
- Conklin James. 年代不明. Fishing in Deep Waters.
- Dickerson Ben and Doris. 1965-66. Baw Gaow Station Report. Dickerson Doris H. 1965-66 KBC report.
- . 1973. Karens in Thailand. American Baptist International Missionary, edited by Halen M. Powers. Valley Forge.
- Dickerson, Thomas Bennett. 1967. *Some Characteristics of High and Low Adapters in Karen Village Society, North Thailand*. MA thesis. Cornell University.
- Hayami Yoko. 2004. *Between Hills and Plains: Power and Practice in Socio-Religious Dynamics among Karen*. Kyoto: Kyoto University Press.
- Hefner, Robert W. 1998. Multiple Modernities: Christianity, Islam, and Hinduism in a globalizing age. *Annual review of Anthropology* 22: pp83-104.
- Hilltribe Research Institute. 1985. *Survey of Socio-economic Conditions in the Project Areas of the Thai- Norwegian Church Aid Highland Development Project*. Chiang Mai University.
- Hovermyr, Ander P. 1989. *In Search of the Karen King*. Upsala: Studia Missionalia Upsaliensia.
- Kammerer, Ann. C. 1990. Customs and Christian Conversion among Akha Highlanders of Burma and Thailand. *American Ethnologist* 17(2): pp277-291.
- . 1996. Discarding the Basket: The Reinterpretation of Tradition by Akha Christians of Northern Thailand. *Journal of Southeast Asian Studies* 27(2)

pp320-333.

Keyes, Charles F. 1979. The Karen in Thai History and the History of the Karen in Thailand. In *Ethnic Adaptation and Identity: The Karen on the Thai Frontier with Burma*, edited by Charles F. Keyes, pp.25-62. Philadelphia: Institute for the Study of Human Issues.

Kwanchewan, Buadaeng. 2003. *Buddhism, Christianity and the Ancestors: Religion and Pragmatism in a Skaw Karen Community of North Thailand*. Chiang Mai: Social Research Institute.

Loo Shwe. 1962. The Karen People of Thailand and Christianity. Rangoon: Typescript, n.p.

Mann, Richard. 年代不明. CUHT Agriculture report. 1965-66. KBC report.

Rachabanditayasathan. [王立学士院] 1999/2542. Lak ken kan thot aksan thai pen aksan roman baep thai siang. [音声転写法によるタイ文字のローマ字表記法]

Renard, Ronald. D. 1980. *Kariang: History of Karen-T'ai Relations from the Beginnings to 1923*. Ph.D. Dissertation. University of Hawaii.

———. 1988. Changes in the northern Thai hills: an examination of the impact of hill tribe development work 1957-1987. Chiang Mai, Thailand: Research and Development Center, Payap University.

———. 2001a. *Opium Reduction in Thailand 1970-2000: A Thirty-Year Journey*. Silkworm Books.

———. 2001b. On the Possibility of Early Karen Settlement in the Chiang Mai Valley. In *Inter-Ethnic Relations in the Making of Mainland Southeast Asia and Southwestern China*, edited by Hayashi Yukio and Aroonrut Wichienkeo, pp.59-84. Bangkok: Amarin.

Ro lai. 年代不明. taj sav hku k'sauf dauv taj of hpgof a'geij. [福音伝道とキリスト教会について] mimeographed.

Salemink, Oscar. 1997. The King of Fire and Vietnamese Ethnic Policy in the Central Highlands. In *Development or Domestication?: Indigenous Peoples of Southeast Asia*, edited by D McCaskill & K Kampe, pp.488-535. Chiang Mai: Silkworm Books.

———. 2009. Is Protestant Conversion a Form of Protest?: Urban and Upland

- Protestants in Southeast Asia. In *Christianity and the State in Asia: Complicity and Conflict*, edited by Julius Bautista and Francis Khek Gee Lim, pp.36-58. London and New York: Routledge.
- Seguinotte, Joseph. 2007. *Liz Taj k'toz av Hkaup'nyau: Pgaz K'Nyau- Cauf taif- Hparasei- Kauz la wa*. (Karen Dictionary into Thai-French-English.)
- Swanson, Herbert R. 1988. A New Generation: Missionary Education and Changes in Women's Roles in Traditional Northern Thai Society. *Sojourn: Journal of Social Issues in Southeast Asia*. 3(2): pp187-206.
- Tapp, Nicholas. 1989. *Sovereignty and Rebellion: The White Hmong of Northern Thailand*. Singapore: Oxford University Press.
- TBMF (Thailand Baptist Missionary Fellowship) 1953. Van Benschoten to Carl Capen, September 25, 1953.
- . 1954. TBMF Annual Report. Van Benschoten. You shall be my Witnesses. A Thailand Missionary.
- TH-NDP (Thai - Norwegian Church Aid Highland Development Project). 1986. Half-Year Report. (Jan-June 1986)
- TKBC (Thailand Karen Baptist Convention). 2008a. Kauj jauf taef pgaz k'nyau ble thi k're moj pgajz: taj sav khu k'sau pgae thauf 125 nif. [タイ国カレン・バプテスト会議：福音到来125年]
- . 2008b. kauj jauf taef k'nyau blue thi a'miv shef n' rif khi p'thauj t'p'thauj. [タイ国カレン・バプテスト・ミッシヨナリーの種]
- . 2010. kauj jauf taef pgaz k'nyau ble thi k're moj pgajz t'mlej taj of phgo phav dof 55 blau t' blau. [タイ国カレン・バプテスト会議第55回年次大会]
- Womack, William Burgess. 2005. *Literate Networks and the Production of Sgaw and Pwo Karen Writing in Burma, 1830-1930*. Ph.D. Dissertation. University of London.
- 池田一人。2012。「ビルマのキリスト教徒カレンをめぐる民族知識の形成史：カレン知の生成と『プアカニョウの歴史』の位置づけについて」『東洋文化研究所紀要』162：154-266ページ所収。
- 石森大知。2011。『生ける神の創造力：ソロモン諸島クリスチャン・フェローシップ教会の民族誌』京都：世界思想社。

- . 2019. 「宗教と開発をめぐる新展開—ポスト世俗化時代の人類学に向けて—」
『宗教と開発の人類学—グローバル化するポスト世俗主義と開発言説』石森大地、
丹羽典生（編）、9-50ページ所収。横浜：春風社。
- 田崎郁子。2010. 「生業の表象と民族の表象：タイ国におけるセタキット・ポー・ピア
ング（足るを知る経済）言説の変遷とカレンの生業をめぐる実践」増田和也。田崎
郁子。大石和男。『公共圏との相互関係にみるサブシステムの表象と実践』（ワー
キングペーパー次世代研究6）京都大学 GCOE プログラム「親密圏と公共圏の再編
成をめざすアジア拠点」22-31ページ所収。
- . 2016. 『タイ北部プロテスタント派カレン地域における宗教実践と社会経済
関係の動態』博士論文、京都大学。
- . 2018. 「タイ北部カレン村落におけるイチゴ栽培の導入と労働形態、社会経
済関係の再編」『東南アジア研究』56(1)：33-66ページ所収。
- 西本陽一。2009. 『周縁化と宗教変化の社会的経験—北タイの伝統派およびキリスト教
徒ラフ集団の事例—』博士論文、東京大学。
- 藤村瞳。2015. 「バプテスト宣教の文脈からみる19世紀中葉ビルマのカレン像形成—宣
教師メイソンによる『カレンの使徒』（1843）を題材に一」『東南アジア研究』52(2)。
295-322ページ所収。